故郷の人物を知ろう

たかおか 温故知新

国泰寺を開いた高僧／慈雲妙意（1274～1345）

慈雲妙意は南朝・北朝の天皇をはじめ多くの人々から尊敬を集めた高僧です。現長野県出身の慈雲は1285年、現新潟県の五智院で出家します。関東各地を経て、1296年、北陸の曹洞禅への行脚の途中、幽玄な二上山に惹かれて山中に草庵を構えます。ここを訪れた孤峰覚明（三光国師）の誘いにより、現和歌山県の由良興国寺の無本覚心（法灯国師）のもとで修行して悟りを開きます。無本の死後は孤峰の弟子となり、1299年に二上山に戻り、摩頂山東松寺を開いたとされます（現弘源寺（氷見市）付近）。慈雲の名は全国に広まり、1327年には朝廷で後醍醐天皇に法話をし、清泉禅師の号を賜ります。さらに翌年、「勅額（天皇直筆の額字）」を賜り、以後国泰寺と称し、京都南禅寺と同格の勅願所となったとされます。慈雲が72歳で死去すると北朝の光明天皇より「慧日聖光国師」の諡号が贈られました。写真の木造慈雲坐像は、2017年東京国立博物館の調査によって、作者が仏師・運慶の子孫で1532～55年に活躍した康運と判明しました。国泰寺では、この坐像を祀り、毎年6月に慈雲禅師を偲んで開山忌が盛大に行われています。（仁ヶ竹主幹）

慈雲坐像（博物館蔵絵葉書）

問合先　博物館 TEL 20－1572